

【 第8回アジア太平洋ろう者競技大会を振り返ってⅡ 】

開幕戦での一番の心配事は、初日の練習後の送迎バスが3時間以上も遅れたこともあったのでバスが時間通り来るかどうかでした。今回は、10時発のバスでホテルを出て、30分程でグラウンドに到着し、14時のキックオフに余裕を持って準備ができ初戦を迎える事ができたので、そうした心配は杞憂に終わりました。

カザフスタン戦前のミーティングでは今日は「試合」ではない、「死合」ということを伝えました。事前に相手の情報がまったくない状態で迎えられたことが、返ってチームのできることに、自分と向き合うことに集中できました。

予選リーグ2戦目のイラン戦は敗れはしましたものの現時点での日本のチーム・選手の立ち位置、通用することしないことを非常に実感できました。国を代表しての戦いである以上は、結果がすべてですが、この1戦を経験したことが決勝までの道のりとして、チームの大きな成長につながりました。また、心折れずに最後まで戦い抜けたことが何よりも大きな収穫で、この敗戦を引きずらずに気持ちを切り替えられたことがオーストラリア戦の勝利につながりました。

協会スタッフが毎試合朝早くから次の相手のビデオ撮影とスカウティ

ングのため会場に向かい、試合中はサポートしてくださり、試合後はすぐに次の試合の準備をして下さって休みなくサポートしてくださいました。また、試合時間にあわせて練習時間もすべて同じ時間で調整交渉していただいたことによって、2週間、同じリズムで生活できたことが大きな助けになりました。

監督に就任したばかりの頃はできるだけ感情を出さないように心掛けてきました。それは選手は監督の表情をみて喜んだり、落ち込んだりするからです。しかし、最近はベンチで感情をあらわにする自分がいます。今回のアジアで準優勝しても大した記事にもならず、世間にも知らない人が多いこの大会に人生を賭けて戦いに来ている選手たちを預かっています。監督として彼らの気持ちを汲むとどうしても何とか勝たせたいのです。ただ、純粹に勝ちたいのです。そんな強い思いから必死になりベンチに座ってられないのです。

日本ろう者代表チームはどんなサッカーをしていますか？どんなサッカーをしていきたいですか？と最近、よく質問されます。多くの人を楽しませるようなサッカーがしたいと選手、スタッフみんなが思っておりますし、そんなサッカーを目指して、毎回合宿を行っていますが、我々はやはり結果を必要としています。

時には、やりたいプレーや良いプレーをしているだけでは結果に結び

つかないこともあります。内容も追求し過程も大切にしつつも勝つためにはどうすればいいかを考えています。サッカーの勝負は運の関与する割合も大きく、実力の差があっても勝負は最後までわかりません。サッカーの神様が最後を決めるものだと思いますので、試合開始まで出来る限りの準備をし、試合中はできる事をし、やれることをやりきった結果全てを受け入れることを腹に決めております。

練習や試合でも私生活でもチームのために尽くすことを、その「和」を大事にすることをここにいる選手たちに求めています。しかし、人は大切な人（家族や恋人）を思うときこそ力を一番発揮できるのではと考え、苦しいときにこそ、大切な人の顔を浮かべて戦うことを試合前に選手たちに伝えました。それが自然とチームの力になるはずと信じているからです。そして、大会後にはその人達と喜びを分かち合っほしいと思い、デフリンピック出場権の懸かった準決勝に臨みました。